第５学年１組　国語科学習指導案

千葉市立都小学校
指導者　大竹　拓郎

１　単元名　　「漢文を楽しむ会」をひらこう

２　単元の目標

〇言葉の響きやリズムのよさと昔の人のものの感じ方や考え方に関心を持ち、さまざまな漢文の作品を進んで味わおうとする。（関心・意欲・態度）

〇親しみやすい漢文について、内容の大体を知り、音読することができる。（伝国・言語についての知識・理解・技能）

３　単元の評価規準

国語への関心・意欲・態度	言語についての 知識・理解・技能
・漢文の書き下し文の響きやリズムのよさを楽しみ、進んで音読しようとするとともに、昔の人と自分との、ものの見方や感じ方の共通点や違いに関心をもっている。	・親しみやすい漢文について、内容の大体を知り、音読している。 《伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項　ア（ア）》

４　単元について

（１）本単元を貫く言語活動と扱う教材

本単元では、「お気に入りの漢文を紹介する」という言語活動を設定する。長い年月をかけて培われてきた文化である漢文やその書き下し文、現代語訳にふれる経験は、自我に目覚め始めた高学年の児童の中に共感や納得などさまざまな気持ちを芽生えさせるだろうと考える。漢文に楽しみながら親しませていくために、今回は教師自作の漢文集『漢文に親しもう』の中からお気に入りを選び、同じ作品を選んだ友達とともにその良さを音読を交えて紹介する活動を行う。気に入った作品を選んだりその理由を考えたりする活動や友達と作品の魅力について話し合う活動は、児童の漢文に対する関心・意欲を引き出し、主体的に取り組もうとする学習につながるだろうと考える。さらにそれを学級の友達に紹介する活動では、聞いている相手を意識することで、作品のよさが伝わるような発表にするために、作品が表す情景や内容について深く読み取ろうとするだろう。これらの活動により、「親しみやすい漢文について、内容の大体を知り、音読しようとする。」《伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項　ア（ア）》を実現することができると考えた。

教育出版のひろがる言葉（上）には、「春暁」「春夜」「静夜思」の漢詩三編と、「論語」「大学」の一節が掲載されている。それぞれ、現代の言葉とは異なるリズムや響きを読み味わったり、昔の人のものの見方や感じ方を感じ取らせたりするために選定されているものであるが、本単元では、より多くの作品にふれさせることで、自分の思いや考えにぴったりのものを見つけ、古典への興味・関心を引き出したいと考えた。そこで、『漢文に親しもう』を教材として使うことにした。そこには、音読することで季節やリズムを感じ取りやすいと考えたもの（「江南の春　杜牧」「春望　杜甫」「探春　戴益」）、昔の人のものの見方や感じ方を簡潔にとらえやすいと考えたもの（「論語」から数編）を載せる。これらを毎日の音読の一つとしても取り組めるようにし、無理なく親しませていきたいと考える。

（２）本単元で身につけさせたい力

本単元では、自ら選択した漢文の書き下し文を音読しながら、選んだ理由や感じたことを友達と交流する活動を行う。漢文に触れた経験の少ない５年生の実態をふまえ、声に出して読むことを大切にした指導をすることで漢文に親しませていきたいと考えた。そこで、毎時間のはじめに前時に扱った作品などを声に出して読む時間を設定する。音読の仕方をいろいろ工夫し楽しく取り組めるようにするとともに、漢字を読む順番を変えたり送り仮名を補ったりして漢文に親しんできた日本人の工夫にふれながら、言葉の響きやリズムに親しませていきたい。「楽しむ会」においても、音読や暗唱は紹介の中に必ず入れさせることで、さまざまな作品を音読する機会を多く作るようにし、声に出して読む心地よさを味わわせていきたい。

漢文に親しむためには、自分の思いや考えにぴったりの作品と出会うことが効果的である。そこで今回は、『漢文に親しもう』の中から気に入った作品を選び、同じ作品をお気に入りとした児童同士での交流を取り入れる単元構成を考えた。それにより、選んだ作品に対する興味関心がより高まるだろう。単元のまとめの「漢文を楽しむ会」のグループ発表の際、作品を音読する場面をつくるようにした。気に入った理由を共有したり書き下し文と現代語訳を比べて情景や作品の背景をつかませたりすることが、より豊かな音読につながるように、紹介に向けて各グループを支援していきたい。

以上のことから、本単元で身につけさせたい力を以下のように設定する。

① 漢文の書き下し文を、言葉の響きやリズムのよさを感じながら音読や暗唱をする。
② お気に入りの作品の良さが伝わるように、工夫して音読や暗唱をする。

（３）（１）と（２）の基盤となる言語環境や継続的な取り組み

〇音読カードの取り組み

・本学級では毎日の家庭学習として、音読に取り組んでいる。その課題として、教科書教材や詩の他に、「枕草子」「春暁」「江南の春」などの古典作品や「雨ニモ負ケズ」などの文語調の作品も扱ってきた。また、暗唱にチャレンジする取り組みも行い、暗唱できるようになった児童が増えてきている。また、朝の会の中に音読する時間を位置づけ、古典や文語調の作品に親しむ機会を継続的に作ってきた。

〇話し方・聞き方の掲示

・場に応じた話し方や聞き方が身につくように、教室前面に「話し方・聞き方あいうえお」を掲示している。普段の学習中の発表やグループ活動などで意識させるようにしているが、今回行うおすすめ紹介会でも、その学習効果を高めるために、聞き手を意識した話し方や話し手の意図を考えながら聞く態度に気をつけさせていきたい。

〇漢文にふれる機会をふやす

・単元に入る前から『漢文に親しもう』を持たせ、日々の音読の課題として活用していく。教科書の構成を参考にし、書き下し文と現代語訳、理解を助ける写真などを載せるようにする。また、「声に出そう はじめての漢詩（汐文社）」や「子ども版 声に出して読みたい日本語（草思社）」などをもとに、作者や作品の背景についてわかりやすくまとめた文章も合わせて載せることで、難しいと敬遠する児童が親しみを持てるように工夫する。

・教室内に参考にした書籍など、児童にとってわかりやすく解説されたものを置いておくことで、児童の興味関心に応じて他の作品も手に取ることができる機会を作るようにする。

〇お気に入りチェック表の活用

・『漢文に親しもう』の中から作品を選ぶ際、観点をあたえることで気に入った理由を言葉にしやすくなるだろうと考えた。そこで、①言葉の響きやリズムがいい ②考え方に共感できる の２つを提示し、５段階で記入させていくチェックカードを活用することを考えた。また、一言感想を書けるようにしておくことで、何となくではなく、その子なりの理由が持てるようにしていきたい。

5　児童の実態（略）

6　単元の指導計画（全５時間）

時	学 習 活 動		指導や評価の手立て　◇評価
1	○教師の例示をもとに、「漢文を楽しむ会」で気に入った作品を伝え合う、という学習の見通しを持つ。 ○学習計画を立てる。 ○「春暁」の読み方を確かめながら書き下し文を音読する。 ○ＮＨＫ「おはなしのくに『春暁』」を視聴する。 ○漢字辞典で意味を調べたり現代語訳を確かめたりして、情景を想像する。その情景を絵で表し、交流する。 ○お気に入りチェック表に、お気に入り度を記入する。	漢文集やそれ以外の作品を音読・暗唱する	・教師の例から、発表の形を具体的につかませることで、単元の見通しを持たせる。 ・映像資料を通して、作品の背景や中国語での読み方などを知らせ興味を引き出すようにする。 ◇漢文の書き下し文の言葉の響きやリズムのよさを楽しみながら、進んで音読するとともに、「春暁」の内容の大体を知り、音読しようとしている。（観察から）
2	○前時を振り返り、音読する。 ○「静夜思」「春夜」の読み方を確かめながら書き下し文を音読する。 ○現代語訳を確かめ、２つの詩の夜の情景を比べながら想像し、感想を交流する。 ○「論語」の一節の読み方と現代語訳を確かめながら音読し、昔の人のものの見方、感じ方を知る。 ○お気に入りチェック表に、お気に入り度を記入する。		・さまざまな音読の仕方をさせることで、飽きずに何度も声に出して読めるようにする。 ・交流は少人数で行わせるとともに、簡単な流れを示しておくことで、意見を述べやすくする。 ◇昔の人との共通点や違いに関心を持ち、進んで音読するとともに、それぞれの作品の内容の大体を知り、音読しようとしている。（観察から）
朝学習 家庭学習	○『漢文に親しもう』の作品を音読し、チェック表にお気に入り度を記入する。		
3	○前時を振り返り、音読する。 ○チェック表を確かめたり音読や暗唱を楽しんだりしながら、気に入った作品を選ぶ。 ○選んだ作品に対する自分の考えを付箋に書く。同じ作品を選んだ３、４人でグループを作り、「お気に入り交流会」を行い、考えを交流する。 ○「楽しむ会」での発表の方法について、見通しを持つ。		・付箋に考えを書かせる際には、観点を示すことで交流がスムーズに進むようにする。 ・同じお気に入りを選んだ友達とグルーピングすることで、さまざまな感じ方があることをつかませるとともに、苦手な児童も主体的に学習に参加できるように配慮する。 ◇同じ作品を選んだメンバーと交流し、感じ方に共通点や違いがあることを理解している。（観察から）

4	○グループごとに紹介の仕方を工夫したり例示の中から選んだりして、「楽しむ会」の準備をする。（１つの班３分程度の発表） ・グループでの音読、暗唱の練習　・お気に入りに選んだ理由・感想（リズムの良さ・共感・好きな言葉など） ・昔と今の感じ方の共通点や違い　・情景を絵で表す ・自分の経験や生き方と比べて　・作者についての紹介 ・同じ作者の別の作品　　など ○グループごとに発表練習をする。	漢文集やそれ以外の作品を音読・暗唱する	・教師の例や感想を書く際の視点を掲示しておくことで、児童が参考にできるようにする。 ・魅力がより伝わるように、選んだ作品の音読（暗唱）を取り入れるように助言する。 ◇選んだ漢文の魅力が伝わるような発表にするために、すすんで準備をしている。（観察から）
5	○「漢文を楽しむ会」を行う。 ○発表に対し、感想を言ったり書いたりする。 ○他作品を選んだグループの発表を聞くことで、多様な感じ方や考え方があることをつかむ。　　（本時）		・聞き手には、旗をあげさせたり感想を発表させたりすることで、他作品も楽しもうとする意欲を持たせる。 ・話し方や聞き方などを意識した会になるように助言する。 ◇自分たちの選んだ作品を楽しみながら音読するとともに、友達が選んだ作品の良さを感じ取っている。 （ワークシート・観察から）

７　本時の目標と展開（５／５）

（１）本時の目標

・自分のお気に入りの作品について紹介したり友達の紹介を聞いたりして、作品の良さを味わおうとする。（関心・意欲・態度）

・作品の良さについて、音読練習を生かし発表するとともに、友達の発表にふれ、漢文の響きや昔の人の思いを楽しむことができる。（伝国・言語についての知識・理解・技能）

（２）本時の学習活動

本時は、単元のまとめとして位置づけた「漢文を楽しむ会」を行う時間である。同じ作品をお気にに入りに選んだ友達とグループを作り、その良さが伝わるように紹介する。ここでの「良さ」とは、チェック表での観点（①言葉の響きやリズムの良さ ②自分の感じ方との共通点や違い）が中心となる。発表したり紹介を聞いたりする中で、それらを楽しみながら味わわせていきたい。発表方法はグループごとに違いがあるが、音読を多く入れるように発表の流れを工夫した。個人やグループでの音読や暗唱とともに、クラス全員で声をそろえての音読も取り入れることで、声に出すことで漢文のもつ魅力を感じ取らせていきたい。また気持ちの良い会にできるように、聞き方や話し方について、十分な声かけをしていきたい。

（３）本時の展開（５時間扱いの５時間目）

学 習 活 動	指導や支援の手立て　◇評価
○ 本時の学習内容を確認する。	○本時は、お気に入りの作品が同じメンバーで構成したグループごとの紹介を聞く「漢文を楽しむ会」を行うことで、漢文の魅力を味わう時間であることを確認する。
「漢文を楽しむ会」を開き、いろいろな漢文を楽しもう。	
○「楽しむ会」をもっと楽しむためのポイントを確認する。	○友達と共感できるうれしさや違いを知る面白さがあることに触れ、そのような視点で聞き合いができるよう、声かけをする。 ○話し方・聞き方、マナーなどについて、掲示物を示し、意識できるようにする。
○ グループごとに前に出て、自分たちの選んだ作品の魅力を紹介する。 ・ぼくたちの気に入った漢文を紹介します。それは「春夜」です。春の夜のさみしい感じが出るように暗唱するので、聞いてください。「…。」（拍手） 　次は、みなさんも一緒に読んでください。「…。」 　ぼくは、１行目の「春宵一刻値千金」のところが特に気に入りました。なぜかというと、春の夜という時間を、お金に例えているところが面白いからです。 　わたしは、このさみしい春の夜の様子を絵に表してみました。音読に合わせて見せます。　どうでしたか？ 　リズム良く音読できて、すぐに覚えてしまうので、みなさんも暗唱してみてください。 　最後にもう一度、音読します。「…。」これで発表を終わりにします。ぼくたちの紹介した作品もいいな、と思った人は、旗をあげてください。 ・ぼくたちの気に入った漢文は、「探春」です。声に出して読むと、リズムが良くてすらすら読めるからです。音読してみます。「…。」（拍手） 　次は、みなさんも一緒に読んでください。「…。」 　ぼくが気に入ったのは、春を探している一生懸命さと、身近なところで見つけられたうれしさが伝わってくるところです。探していたものがやっと見つけられた時の気持ちは、今も昔も同じなのかなと思いました。 　戴益と言う人の作品が他にもあれば読んでみたいと思いました。見つけた人は、ぜひ教えてください。 　最後にもう一度、音読します。「…。」これで発表を終わりにします。ぼくたちの紹介した作品もいいな、と思った人は、旗をあげてください。	○グループの人数は、児童の実態や思いを尊重して柔軟に決め（１～５名）、自分の考えを自分の言葉で伝えられるようにする。 ○発表の中に音読をする場面を多く作ることで、学級全体が漢文に親しむことができるようにする。 ○音読では、作品のよさが伝わる読み方を考えさせて行わせる。その際、実態を考慮しながら、個人かグループかを選択させる。 ○発表する作品を模造紙に書いたものを黒板に掲示させることで、全体で音読しやすい場をつくる。 ○情景を表した絵などを紹介する際には、画用紙に書かせておくことで、見やすさを意識させる。 ○聞き手の児童には、はなまるを書いた旗を持たせておく。発表を聞いて共感し、「その作品もいいな。」と感じたときには、発表後に旗を振らせることで、共感的な雰囲気の聞き合いとなるようにする。 ○作品の楽しみ方はそれぞれであり、共感したり違いを感じたりすることにより、さらに深く味わえるようになることを全体でおさえる。

・ぼくたちの気に入った漢文は、論語の「生きる上で大切なこと」です。音読してみます。「…。」（拍手） 　次は、みなさんも一緒に読んでください。「…。」 　わたしは、思いやりを一番大切にしなければならないという考えが好きなので、この作品をお気に入りに選びました。これからは、友達や家族のことをもっと大事にして生活していきたいと思いました。 　ぼくは、この考えを２０００年以上前の人が言っていたのを知って驚きました。孔子の考えは、今の人たちにとっても大切なことだと思います。他の言葉ももっと調べてみたいです。 　最後にもう一度、音読します。「…。」これで発表を終わりにします。ぼくたちの紹介した作品もいいな、と思った人は、旗をあげてください。	○発表ごとに、１、２名に感想を発表させ、様々な感じ方があることをつかませる。 ◇自分の選んだ作品を、音読したり紹介したりして、その良さを感じている。 （観察から）
○　「楽しむ会」を振り返って、プリントに感想を書く。	○感想の記述とともに、学習を通して漢文に親しめたかどうかを３段階で自己評価させるようにする。 ○リズムや言葉の響き、昔の人のものの見方感じ方に触れているものをいくつか発表させる。 ◇自分や友達の発表から、さまざまな作品の良さを感じ、漢文を楽しんでいる。 （観察・感想から）
○　漢文をいくつか音読し、学習のまとめをする。	○改めて音読してみたい作品を発言させ、それを全員で音読することで、リズムの良さや言葉の響きを味わわせ、漢文への親しみを感じ取らせる。

漢文 お気に入りチェック表

（5点～1点でお気に入り度をチェック！）

	題名	言葉のひびきリズムがいい	作者の考えがよくわかる！	ひとこと感想
1	春暁			
2	静夜思			
3	春夜			
4	江南の春			
5	春望			
6	探春			
7	生きる上で必要なこと			
8	むかしのことを学ぶ理由			
9	いじめを見つけたら・・			
10	テストが帰ってきたら・・			
11	友達を大切にしよう！			
12	人生は、どう進むの？			

漢文に親しもう

昔の中国の書き言葉を、「**漢文**」と言います。これは、昔の中国の詩です。

春暁　孟浩然

春眠　暁を　覚えず
処処に　啼鳥を　聞く
夜来　風雨の　声
花　落つる　こと　知る　多少

春の明け方

春のねむりのここちよさに、
夜が明けたのも気がつかなかった。
あちこちから、
鳥の鳴き声が聞こえてくる。
昨夜、風や雨の音が聞こえていた。
花はいったい、どれくらい
落ちたのであろうか。

もちろん、もとは日本語ではなく中国語です。しかし、日本語でも楽しむことができるように、漢字を読む順序を変えたり送りがなをおぎなったり工夫して、日本人は漢文に親しんできました。うらのページは、もとの詩です。昔の人がどのような工夫をしたのか、見比べてみましょう。

春暁　孟浩然

春眠不覚暁
処処聞啼鳥
夜来風雨声
花落知多少

春は、寒さがやわらいで、ポカポカあたたかくなってくる季節です。みなさんも、あまりに気持ちがよくて、「もっとねていたいのに。」と思ったことはないですか。

この詩は、春のねむりの心地よさと、鳥や花にかこまれながらの目覚めの様子をよんでいます。ゆったりとした朝の時間に、「そういえば昨日の雨で、ずいぶん花が散ったのかな。」と花の心配をしています。何だかおだやかな気持ちになってきますね。

☆こんな工夫を発見したよ！

孟浩然（六八九～七四〇）

役人になろうと、何回も試験を受けましたが、合格することはできませんでした。

自然の様子を詩に表すことがとても上手な詩人です。

☆「春暁」を読んで、思い浮かべた様子を絵に表してみよう。

☆「春暁」を読んで、感じたことを書いてみよう。

春夜（しゅんや）

蘇軾（そしょく）

春宵（しゅんしょう）一刻（いっこく）値（あたい）千金（せんきん）
花（はな）に清香（せいこう）有（あ）り　月（つき）に陰（かげ）有（あ）り
歌管（かかん）楼台（ろうだい）声（こえ）細細（さいさい）
鞦韆（しゅうせん）院落（いんらく）夜（よる）沈沈（ちんちん）

春の夜

春の夜のひと時は、千金（せんきん）のねうちがある。
かぐわしい花の香りがただよい、
月はおぼろにかすんでいる。
歌や笛の音は、高殿（たかどの）にかすかにひびき、
ブランコのある中庭に、夜が静かにふけていく。

※千金・・・とても価値がある。
　何ものにもかえられない
※かぐわしい・・うっとりするような、いいにおい
※おぼろに・・ぼんやりと
※高殿・・・高い建物

みなさんは、好きな季節や時間がありますか。作者にとって、それは春の夜であり、お金にすると千金になると言っています。今でも、すばらしい夜景のことを「百万ドルの夜景」と言ったりすることがありますね。

美しい花のよい香り、かすんで見える月。歌や笛の音がかすかに聞こえて、ついさっきまで春の夜を楽しんでいた様子が感じられます。月の光に照らされたブランコがポツンと下がっているさみしさも、悪くない感じがしませんか。

蘇軾（一〇三六～一一〇一）

詩だけではなく、文章を書くことも得意でした。それに、書道や絵も上手。すごい人ですね。

静夜思（せいやし）

李白（りはく）

牀前（しょうぜん）　月光（げっこう）を　看（み）る
疑（うたが）うらくは　是（こ）れ　地上（ちじょう）の　霜（しも）かと
頭（こうべ）を　挙（あ）げて　山月（さんげつ）を　望（のぞ）み
頭（こうべ）を　低（た）れて　故郷（こきょう）を　思（おも）う

静かな夜のもの思い

寝台の前にさしこむ月光を見て、
地上におりた霜ではないかと思った。
頭をあげて、山のはしにかかる月を望み、
頭をたれて、故郷のことを思った。

※もの思い・・あれこれ考えること

※寝台・・・ベッド

※望む・・・遠くを見る

この詩は、前半の二行で目の前の景色をうたい、後半の二行で作者の気持ちをうたっています。

夜中に、ふと目を覚ましたところ、白い月の光がさしこんでいます。そして頭をあげると、山の上にはさびしげな秋の月。それをながめていると、ふるさとのことを思い出してしまったのでしょう。しかし、すぐにはふるさとへは帰れません。そう思うと、自然と頭がたれてしまうのです。

李白さんのふるさとでも、同じような風景が見られるのでしょうか。

☆二つの夜の詩を読んで、同じところやちがうところはあるかな。

李白（七〇一～七六二）

中国各地を旅しながら、たくさんの人と出会ったり別れたりしたことを詩にしました。

孟浩然さんと友人で、詩の先生として、尊敬していたそうです。

江南の春

杜牧

千里　鶯　啼いて　緑　紅に　映ず
水村　山郭　酒旗の　風
南朝　四百八十寺
多少の　楼台　烟雨の　中

江南の春

見わたすかぎりの風景の中、うぐいすが鳴き、
木々の緑と花の赤とが、美しく照り映えている。
川辺の村や山間の村が見え、酒屋ののぼりが
春風にはためいている。
思えば、南朝の昔、この地には多くの美しい寺が
立ち並んでいたのだな。
そのなごりが感じられるたくさんの高殿が、
春雨の中にかすんでいる。

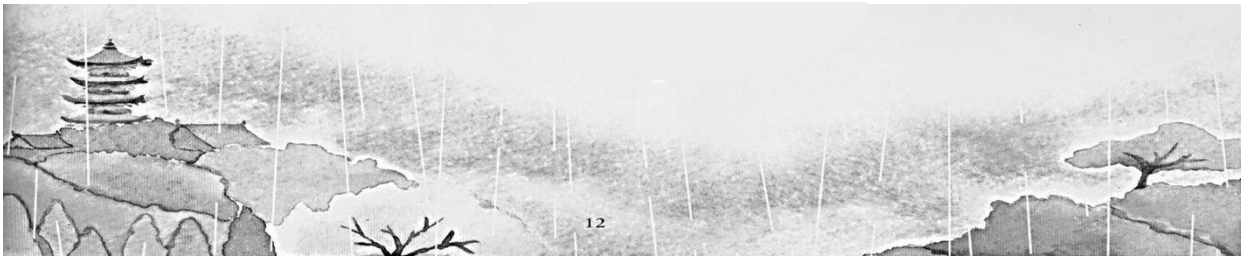
のぼり（旗）

※江南・・・中国にある、あたたかい地方

※のぼり・・・竹につけた旗

※南朝・・・中国の昔の時代

※高殿・・・高い建物



中国の江南地方の、のどかな春景色をうたった詩です。前半にうたわれている明るい農村の風景と、後半の昔の町の風景、その2つの風景が絵みたいに頭に浮かんでくるようです。

どこかから聞こえるうぐいすの声。若葉の緑と真っ赤な花の色。耳と目で感じたことが、詩の中に上手に表現されていますね。

のどかな春の景色の中に、古いものをなつかしんでいる作者の思いがよく伝わってくる詩です。

杜牧（八〇三～八五三）

役人の試験に合格し、立派に仕事をした人だそうです。わかりやすく書かれた詩が多く、江戸時代の人々にも多く読まれていたそうです。

春望　杜甫

国破れて山河在り
城春にして草木深し
時に感じては花にも涙を濺ぎ
別れを恨んでは鳥にも心を驚かす
烽火三月に連なり
家書万金に抵る
白頭掻けば更に短く
渾て簪に勝えざらんと欲す

春のながめ

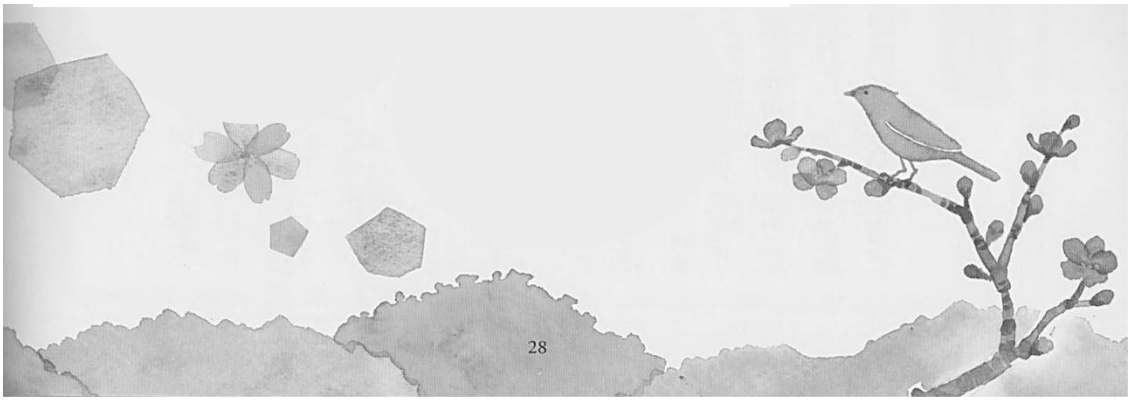
都は戦いでこわされてしまったが、
山や川は昔のとおりに残っている。
この城も、春は来たけれど、
草木がたくさん生えているのみで、人かげも見えない。
つらく苦しい時代を感じては、花を見ても涙を流し、
家族との別れをうらんでは、
鳥の鳴き声を聞いても心が痛む。
戦乱が3ヶ月も続いている中で、
家族からの手紙は大金と同じぐらい貴重だ。
しらが頭をかけば、そのたびに髪の毛が短くなって、
冠をとめておくピンさえもつけられなくなってしまった。

杜甫（七一二～七七〇）
代々、役人や学者の家に生まれましたが、役人の試験には合格しませんでした。
戦争でとらわれの身となったとき、都がはかいされていくのを、とても悲しんだそうです。

『国やぶれて　山河あり、城春にして　草木深し』の部分は、リズム感があり、日本でも昔から口にされてきた名句です。

いつまでも変わらない自然に対して、あっけなくこわれてしまう人間の世界。平和であれば心を楽しませてくれる「花」や「鳥」が、戦いの世の中となると、反対に悲しみを感じさせるものになってしまうのですね。

年をとってしまった自分への悲しみだけでなく、国の平和をねがった作者の心情が、よく伝わってきます。



探春（たんしゅん）

戴益（たいえき）

終日（しゅうじつ）　春（はる）を尋（たず）ねて　春（はる）を見（み）ず
杖藜（じょうれい）　踏（ふ）み破（やぶ）る　幾重（いくえ）の雲（くも）
帰（かえ）り来（きた）りて　試（こころ）みに　梅梢（ばいしょう）を把（と）って　見（み）れば
春（はる）は枝頭（しとう）に在（あ）りて　既（すで）に十分（じゅうぶん）

春をさがす

一日中春を探したが、春らしい風景を
見つけることができない。
杖（つえ）をつき、山の中をかきわけ歩いたが、
ただ、つかれただけであった。
家に帰って、何気（なげ）なく梅の枝をとってみると、
いつのまにか、つぼみもふくらみ、
春の訪れをみせていた。

作者の「戴益（たいえき）」という人のことは、くわしくはわかっていないそうです。また、詩もこの一つだけなのですが、それでもすばらしいので、有名になっています。

さがしても見つけられない、という残念さ。わかりますよね。それだけに、見つけたときのうれしさは、きっと大きかったでしょう。それが小さなつぼみであっても。

さがしている大切なものは、身近にあるかも。たとえば、「春」を「しあわせ」と読み変えてみると、またちがう味わい方ができますね。

次に書かれているものは、「論語（ろんご）」という本の一節です。
論語には、孔子（こうし）という人がお弟子さんたちに話した言葉が書かれています。短い文章の中に、人間が生きていく上でためになる言葉や教えがたくさんのっています。
声に出して読んでみましょう。

生きる上で大切なこと

子曰（しい）わく、
其（そ）れ恕（じょ）か。
己（おのれ）の欲（ほっ）せざる所（ところ）を、
人（ひと）に施（ほどこ）すことなかれ。

※子（先生）とは、孔子のことです。

お弟子さんの質問
「先生、死ぬまで大切にしなければならないこととは何ですか。」

孔子先生はおっしゃった。
「それは、思いやりである。
自分がのぞまないことは、
人にやってはいけない。」

これは、すごく簡単なことですが、大人でもなかなかできません。だから、みなさんができるようになったら、とっても立派なことです。
いつも、「自分がやられたらどうだろう？」と思って、してほしいことをしてあげて、いやなことはしないようにしてましょう。

孔子（前五五二～前四七九）
孔子は、イエス・キリストが生まれるより五〇〇年以上も前にこの世に生まれて、たくさんの教えを残した人です。
家は貧しかったのですが、一生けんめい勉強して、人はどう生きるべきか、理想の政治とはどんなものか、人々に教えました。その教えを聞くために、たくさんの弟子たちが集まったそうです。

むかしのことを学ぶ理由

子曰わく、
故きを温ねて新しきを知る、
以って師と為るべし。

孔子先生はおっしゃった。
「まずは、古いことをよく勉強し、
そこから、今の世にも役立つものを
知ることだ。
そうすれば、人の先生になれるだろう。」

「温故知新」という四字熟語になっているくらい、有名な言葉です。なぜ有名になったかというと、勉強する本当の意味を教えてくれているからです。

むかしのことをよく知らないと、新しい発明も生まれません。新しいことができるようになるためには、まずは、古いことが必要なんですね。

いじめを見つけたら・・・

子曰わく、
義を見て為ざるは、
勇なきなり。

孔子先生はおっしゃった。
「やらなければならないことを
目の前にしながら、
何もしないのは
勇気のない人間である。」

みんなは、目の前でだれかがいじめられていたら、どうしますか？
困っている人を見てしらんぷりするのは、「事なかれ主義」といいます。そうすると、となりの国で戦争があっても、みんな「知らない」というでしょう。
そんな世の中にしたいと、みんなは思いますか？

テストが返ってきたら・・

子曰わく、
過ちて改めざる、
これを過ちという。

お弟子さんの質問
「先生、『あやまち』とは、なんですか。」

孔子先生はおっしゃった。

「だれでも、まちがうことはある。
しかし、まちがってしまったのに、反省しないで
直そうとしない。これが本当のあやまちである。」

テストが返ってきたら、ちゃんと見直して、もう一度やり直しているかな。同じまちがいを大人になってしていたら、進歩がないね。

だから、まちがえてしまっても落ちこまない！もう一回やって、まちがえないようにしておくくせを、今のうちにつけておきましょう。2回目にやってまちがえなければ、もう大丈夫！

友達を大切にしよう

子曰わく、
朋あり遠方より来たる、
また楽しからずや。

孔子先生はおっしゃった。
「友達が自分に会うために、
遠いところからたずねてきてくれる。
なんと楽しくうれしいことか。」

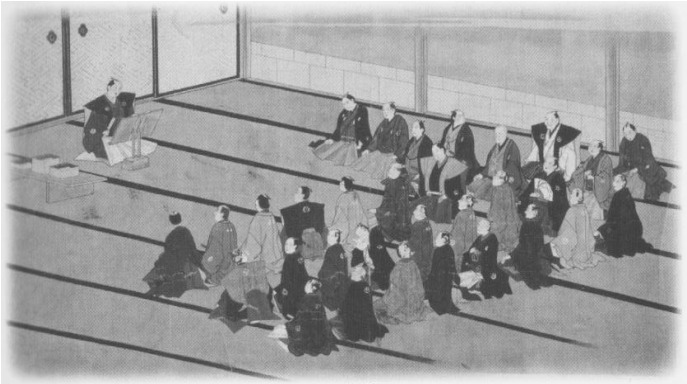
孔子先生は、友達が遠くからたずねてきてくれることを、人生の一番の喜びにしていたそうです。
みなさんも大人になったとき、おたがいに会いに行って喜び合えるような友達がたくさんつくれるといいですね。

人生はどう進むの？

子曰わく、
吾れ十有五にして学に志す。
三十にして立つ。
四十にして惑わず。
五十にして天命を知る。

孔子先生はおっしゃった。
「わたしは、十五才のとき、学問を志した。
三十才になって、学問のきそがわかるようになった。
四十才になって、自信がもてるようになり、迷わなくなった。
五十才になって、天から与えられた仕事が何かを理解できた。」

孔子先生は、十五才のとき、自分は学問で生きていくんだと決心したそうです。そして人の役に立つ立派な先生になりました。
何となく勉強して、例えば大学に入っても何をしていいかわからないなら、それは時間のムダですよね。そうならないためにも、十五才くらいには将来の目標をしっかり決めて、それに向かってしっかり勉強できるといいですね。


湯島聖堂の講義風景